

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	鈴木康則
<p>主 論 文 題 名 :</p> <p>条件への思考——ジャック・デリダ「暴力と形而上学」の読解</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本論文は、ジャック・デリダの『エクリチュールと差異』（一九六七年）に収録された「暴力と形而上学」において展開された諸概念のうち、デリダ哲学の中心的概念の一つである「超越論的なもの」の位相に着目し、とりわけ「暴力」や「尊重」という語に込められた意義を問題概念として捉え、デリダの哲学的意図に対し、統一的な観点から評価を与えることを目指すものである。</p> <p>デリダが着目する「暴力」や「尊重」はあくまで「超越論的」次元において問題となるものであるから、それらが通常の意味での「暴力」や「尊重」、「尊敬」といった事象とどのような関係にあるのかが問題となる。さらに「現象学」と「倫理」の関係という論点において問われるべきは、そもそも「倫理」とはいかなる事態の謂いなのかという問いである。これまでのデリダ研究においては「暴力」概念は度々主題化されながらも、なぜ「暴力」と名指されねばならないのかという点について明確に規定されないままであったように思われる。</p> <p>こうした事態を避けるために、本論文ではデリダが言及する様々な文献に着目するのは当然のこととして、デリダが言及していない当時の文献も考察の対象としている。これはデリダの思考を把握するためには、彼が置かれていた時代的な哲学的状況を捉えることが不可欠と考えたためである。デリダが論じている内容を理解するためには、当然ながら彼の文章を丁寧に読むことが必要なのは明らかであるにしても、周辺的な文章を読解の装置として準備することで、より良くデリダの哲学的意図を把握できるように思われる。</p> <p>これらの予備的作業に基づき、本論文が提示する主張をまとめておく。</p> <p>第一には、デリダはレヴィナスに対する批判において、自身の哲学的主張を提示していたと思われるのだが、レヴィナスが『全体性と無限』（一九六一年）で論じた「他人」の現れ方についての議論に問題が認められるだけでなく、レヴィナスに対するデリダの批判にも疑問点が残るのではないかと、という点である。レヴィナスは「無限」という論点を提示することで、「眼差し」の問題や「道徳」の在り方を提起するだけでなく、否</p>			

定・肯定という地盤に準拠しないような「知」の在り方を示そうとした。「無限」として「他人」を扱うことは、「共通基盤」なき関係の在り方を思考することであり、レヴィナスにとっては西洋哲学の根本的変革を促す意義を持つものとして評価できるはずだった。ところが『全体性と無限』での「顔」の議論は、単純な「肯定性」に依拠してしまうがゆえに、デリダの批判を浴びる。だがデリダの批判もある意味で単純な「否定性」に依拠してしまったがゆえに、同様の批判を浴びるべきものである。デリダとレヴィナスの間でのこの論争を読み解く手掛かりとして本論文が依拠するのは、「無限」および「無限判断」という論点である。

第二に、デリダの「超越論的」な「暴力」という論点には、評価すべき点と批判されるべき点が存在するというものである。デリダが「超越論的」な意味において「暴力」概念を提示するのは、レヴィナスの「平和」概念に対しての批判が込められていると思われるのであるが、デリダによる「暴力」概念には問題が見出される、というのが本論文の立場である。レヴィナスはデリダと違い、「超越論的」という用語を積極的に用いることはないが、レヴィナスの議論には「超越論的」な次元が論じられているにもかかわらず、デリダが見て取るような「超越論的」次元での事態が含意されていたがゆえに、レヴィナス的「平和」概念には曖昧さが付きまとっていた。デリダの議論は、レヴィナスの議論の曖昧さを明るみに出す意味では有用であった。

ところがレヴィナス批判として提示された「暴力」概念も、デリダの用法には疑問が残るものであったのではないか。このような疑念は早い時期には坂部恵によって提示されており、その後は例えば谷口博史によっても提示されていたのだが、本稿はデリダの「暴力」概念に一定の価値を認めながらも、批判的観点を提示することによって先行研究とはやや立場を異にする。本論文が提示しようとするデリダへの評価は、デリダの「暴力」概念に肯定的意義を認めるマーティン・ヘグルンドの『ラディカル無神論』のような立場とは相容れないものである。また同様に、デリダへの批判を企てるとしても、「暴力と形而上学」でのデリダの立論自体に批判を向けるサランスキの議論に対しても本論文は距離を取ることになる。ヘグルンドやサランスキにおいては、デリダの「超越論的」次元での意義が論じられていないがゆえに、デリダの「暴力」概念を適切に扱うことができていなかったのもあって、本論文ではデリダおよびレヴィナスの「超越論的」次元での議論を検証するため、斎藤慶典による『力と他者』等の著作で論じられた、「超越論的」な意味での〈平和〉概念を手掛かりとする。

本論文第一章ではカントの「尊敬」概念と、デリダによる「尊重」概念の違いについて考察される。カントの「尊敬」概念は、リクールによる論考「カントとフッサール」

に登場するもので、デリダは早い時期からその重要性に着目していた。ただしデリダはリクールのカント解釈に同調するわけではなく、カント的「尊敬」に独自の位置づけを与え、同時に「現象学」的発想である「志向性」に対しても独自の解釈を与えている。リクールは「尊敬」を「共感」等の感情から区別して用い、「尊敬」を単なる「主観的感情」と見なすことなく、「実践的契機」として独自の位置を与えようとする。このような独自のリクールの「尊敬」概念は、デリダの「尊重」概念の内実を捉えるための手掛かりとなるものである。概略的に言えば、カント的「尊敬」は「法則」に向けられるものであり、リクールはカントの「尊敬」概念を「人」に対して用いようとする。デリダの「尊重」概念は「法」や「他人」に対して用いられるのではなく、「倫理」に先立つ次元に割り当てられ、「尊重」としての「超越論的現象学」が「倫理」の基礎とされる。デリダは「超越論的現象学」を継承しようとするだけでなく、それに対して改変も同時に狙っていたのである。そのようなデリダの態度から、彼の問題関心の一端を窺うことができるだろう。

第二章では「暴力と形而上学」で扱われた「厳命」の位置づけが検討される。デリダは「暴力と形而上学」において「命令」(commandement)と「厳命」(injonction)を厳密に使い分けているとは言い難いが、文脈に応じて使い分けようとしている、というのが本稿の解釈である。簡略的にまとめると、「命令」は内世界的・経験的な次元でやり取りされるものであるのに対し、「厳命」はそもそも誰かが発したり、具体的なかたちで現れたりするものではない。ブランショは解決がありえないような「問い」を「このうねなく深い問い」と呼び、その「問い」への「応答」を不可避なものと考えたのだが、デリダはブランショの問題関心を、「厳命」という語を用いることで引き継いでいるというのが本稿の見立てである。ブランショの問題設定とデリダの関心を比較することによって、デリダが「哲学」の可能性およびその課題をどのように設定していたのかを探っていく。

第三章では「暴力と形而上学」で扱われる主要な問題としての「暴力」を論じるにあたって、エリック・ヴェイユの思考が取り上げられる。デリダは「暴力と形而上学」において繰り返し「暴力」に言及しているが、デリダ的「暴力」概念が誰の影響下のもとで語られていたのかを考察せねばならない。「暴力」を語っていた人物として挙げられるのは、たとえばマルクスやベンヤミン、ジョルジュ・ソレルやブランショ等であろうが、デリダにとって「暴力」を論じる際の最重要人物はレヴィナスである。ただしデリダはレヴィナス以外にも、「暴力」を哲学的に論じていた人物の名を挙げており、その人物こそエリック・ヴェイユである。

デリダはヴェイユとレヴィナスを比較し、「言説と暴力」の意味が両者のあいだで「正反対」であるという解釈を提示した。デリダによる上記の解釈はヴェイユ理解としてはやや性急ではないか、というのが本稿の見立てである。デリダの解釈はある側面においては正しいとも言えるのだが、実際にレヴィナスとヴェイユのあいだで「正反対」であるのは「暴力」というよりも「対話」や「言説」の位置づけであるのではないか。この仮説を検証するために、ヴェイユが自身の哲学的課題として設定していたと思われる、「対話」の意義を確認する。簡単に言えば、ヴェイユにおける「対話」とは、言語活動の根本的様態として既に共同的であるということである。さらにヴェイユによれば、「対話」とは「矛盾する対談」とも呼ばれ、「共同体」において「一貫性」が追及されると同時に「暴力」が生じてしまう。ヴェイユ的「暴力」はパラドクスのな事態として捉えられており、「哲学」は「暴力」を拒否するけれども、相関的であるという、一種の曖昧さがつき纏うことは指摘せねばならない。このような考察からすると、デリダはヴェイユ的「暴力」の曖昧さとは異なり、より明確な概念として「超越論的暴力」を提示していることが理解できよう。だが検討すべきは、デリダが示す「超越論的暴力」という概念がいかなる意義を持ち、ヴェイユとは別の問題を引き起こしているのかどうかという点であり、その問題点の検討を次章以降で行う。

第四章ではデリダによるレヴィナス批判の内実を検討するために、「他者」が両者によってどのように論じられていたのかを検証する。その際手掛かりとするのは、「他我問題」および「無限」という論点である。レヴィナスは「他人」を論じる際に、そもそも「他我」という発想を採用しないが、その理由は「他人」を「共通性」の観点から把握しないためである。レヴィナスの態度が明白に見て取れる論点として確認できるのは、「絶対的に他なるもの」という語と「無限」という語の使用である。

「絶対的に他なるもの」という表現については、ジャンケレヴィッチとレヴィナスの比較が欠かせない。ジャンケレヴィッチによれば、「自我」と「他者」を共通なものとし「一元論」が否定されるだけでなく、「自我」と「他者」を絶対的な二つのものとし「二元論」も否定される。レヴィナスはジャンケレヴィッチとは異なり、「他者」を「絶対的なもの」とみなす「二元論」の意義を追及する。レヴィナスは「自我」と「顔」の関係が「分離」でありつつも、なお「平和」である点に着目する点においてジャンケレヴィッチの立場と区別されるのである。

デリダもレヴィナスも「無限」という論点を導入する必要性を主張していたのだが、「無限」の扱い方において、両者の立場の違いがより鮮明に見えてくるはずである。この章ではレヴィナスの同僚であったヤコヴ・ゴルディーンが主題化していた「無限判断」

を参照軸とすることに加え、ブランショによる「無限」への言及にも着目しつつ、デリダとレヴィナスの「無限」論の射程および問題点を批判的に考察する。

第五章では「超越論的」とされる次元の位置づけを辿った後、「顔」と「暴力」の問題系を検討する。「顔」という論点においては、「まなざし」がいかなる意味を持つかが問われるのであるが、この章ではサルトルやセール、斎藤らの議論を参照しつつ、「顔」がいかにして到来するのかを論じる。

デリダとレヴィナスのあいだで生じていた見解の差異は、「他人」と「私」との関係性をどう考えるかに際し、「非対称性」を主張するレヴィナスと、「対称性」を強調するデリダという単純な構図ではなかった。両者は「非対称性」については合意していると言える。齟齬が生じていたのは、「顔」あるいは「無限」の現出の仕方に対し、その手前の次元あるいは「条件」として、「私」の側で「知」のシステムが機能していることを認めるかどうかという点である。レヴィナスも「他人」が現出するには「私」という条件が必要であることは当然認めているわけであって、レヴィナスにおいて「顔」の現出の条件、言い換えれば「超越論的」次元の考察が完全に欠けていたわけではない。だが「他人」の「顔」の現出において作用しているはずの、「私」の側の「知」の側面を等閑に付してしまった点に問題がある。

デリダは「顔」という「無限」の現出において、「私」の側で「知」あるいは現出を支える「システム」の存在を指摘したことになる。その「知」は、「私」や「他人」というカテゴリーを超え、その枠組みとして作動しているのであるから、デリダはその「知」を「超越論的」次元での「対称性」と呼んだわけである。だがデリダの理解にも問題が生じていた。「他人」の現出の仕方とは、いわば蓋然的にのみ他人の存在が与えられることであるのだから、「私」と「他人」の関係が常に「ふたつの有限性」であるとは限らないし、ふたつの事実上の「エゴ」の存在である必要はないはずだ、というのが本稿でのデリダに対する批判である。より適切に記述するなら、「他人」の「顔」はそこに存在しているかのように仮説的に定立されている、ということになるだろう。

さらに「顔」において問題となるのが、「平和」および「暴力」の在り方である。レヴィナス的「平和」とデリダ的「暴力」を、いかにして適切な理解にもたらしうるかがこの章の課題である。ここでは坂部と谷口のデリダ解釈を参考にしつつ、デリダの議論の問題点を主題化しようと試み、「超越論的」な「暴力」および「平和」の位置づけを探る。

終章では、亀井やシャリエが言及していた「終末論」を手掛かりとしつつ、宮崎の論じた「コミュニケーション」の議論が、いかにして別の領域への接続となりうるかを検

討する。宮崎はデリダ的「テレコミュニケーションの論理」が「コンセンサスの破壊」を含意するとしながらも、「民主主義」との接続を示唆していた。この点からすれば、デリダ的「政治」は「コンセンサス」とは違う仕方を探求される、と予想されるだろう。本稿の見立てでは、これまで論じられてきた「他者」の「倫理」が維持されるためには、何らかの意味での「共同体」が不可欠であるというものだ。この観点だけでは凡庸な発想にすぎないけれども、「共同体」を「コンセンサス」とは別の仕方提示しようとする点に、デリダ的思考の可能性を見出せるのではないだろうか。ここではデリダが言及していた「夢」や「経験論」を引き合いに出し、「共同体」をいかなる仕方思考すべきかについての若干の展望を提示する。



鈴木康則

条件への思考——ジャック・デリダ「暴力と形而上学」の読解

The Philosophy of the Condition: Reading Derrida's "Violence and Metaphysics"

The aim of this paper is to investigate the intention of Derrida's critique of Levinas' thought, as demonstrated in "Violence and metaphysics." While Levinas insists on the importance of the presence of the other, Derrida counters his argument by focusing on the "condition" of the presence of the other. In Levinas' view, the other gives us a positive notion of infinity. According to Derrida, the other is not present positively or asymmetrically; rather, the other appears through negation.

We will approach the problem of the validity of these two philosophers. Three preliminary tasks are necessary to do so. First, we will examine Derrida's critique of Ricœur's interpretation of Kant. Ricœur criticized the Husserlian phenomenology of the other from the viewpoint of Kant's philosophy, arguing that Husserlian phenomenology lacks the concept of respect, by means of which we can do justice to the other. In turn, Derrida critiques Ricœur's concept of respect and insists on the necessity of respect in Levinas' arguments. Second, we will analyze Derrida's concept of the injunction, which has a transcendental significance and contrasts with a command or a direction ordered by someone. Blanchot, in his "The Most Profound Question," observes that we have become obsessed by a "question" that is impossible to answer. Derrida succeeds to Blanchot's viewpoint and presents the concept of the injunction, which makes clear his perspective on philosophy. Third, we will consider the concept of violence in Eric Weil. Unlike Levinas, Derrida focuses on this concept in a transcendental level, which is different from Weil's approach. Derrida remarks that Levinas' view of violence is counter to Weil's.

What can we find when we investigate the concept of violence? Levinas opposed "Discourse" to violence, but Derrida argued that violence is involved in Discourse. In our view, this controversial situation originates in the difference in their perspectives on infinity, so we accordingly investigate what Jacob Gordin, a colleague of Levinas, called the Infinite Judgment. The problem in Levinas' thought is that his concept of peace lacks a transcendental level. Meanwhile, we will show that Derrida also has a problem, namely his misunderstanding of the function of transcendental violence